

大学教育における、体育科教育の実践報告 - 体育科目における学生間相互評価の活用 -

著者	松本 文夫
雑誌名	紀要
号	20(別冊)
ページ	1-10
発行年	2018-03-20
URL	http://doi.org/10.32125/00000006

大学教育における、体育科教育の実践報告 — 体育科目における学生間相互評価の活用 —

松本 文夫

キーワード：体育科教育法、体育科概論、指導法

I はじめに

現在、日本の学校教育は変化の時期にある。少子化やグローバル化の波はもちろん、キャシー・デビッドソンよれば、「子供たちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就く」と予想しているほか、マイケル・A・オズボーンは「今後10~20年程度で、約47%の仕事が自動化される可能性が高い」と予想しており、現在の職業の多くは今後なくなり、新しい業種の仕事が新たに生まれてくることが示唆されている。今後、子どもたちが変化する社会の中で生きていくために、学校教育は、新しい時代に必要となる資質や能力を育成していくことが求められている。こういった現状を踏まえ、現在、日本の学校教育においては、育成すべき資質や能力を踏まえた、学習指導要領の改訂や高大接続システム改革が行われているところである。

各学校種における学習指導要領の改訂については以下のとおりである。幼稚園、小学校、中学校では平成28年に学習指導要領が改訂され、幼稚園では平成30年度から実施、小学校では32年度から実施、中学校では平成33年度から実施される。高等学校では平成29年に学習指導要領が改訂され、平成34年から年次進行で実施されることとなっている。

高大接続システム改革においては、大学教育改革、高等学校教育改革、大学入学者選抜改革の三者一体の改革を進め、高等教育機関において、次代に求められる資質・能力や、少子化・国際

化の進展の中で、高等教育の質的変換を図ることとなった。

こういった教育改革の流れの中で、大きなポイントとして挙げられるのは、すべての学校種において、アクティブラーニングの視点を取り入れた教育が推進されていくことである。

アクティブラーニングとは、文部科学省によると「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学習することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学修、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループディスカッション、ディベート、グループワーク等も有効なアクティブラーニングの方法である。」と定義している。

その他、次代を担う大学生に求められる力として、経済産業省は、2006年に「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を社会人基礎力として定義し、学生の間身に身につけておくべき能力とした。また、文部科学省においても「知識・理解」「汎用的技術」「態度・思考力」「統合的な学習経験と創造的思考力」を「学士力」として、2008年の答申で、学生に臨まれる能力を定義した。これらの力は、アクティブラーニングの定義するところの各種能力と合致しており、以上のことから大学教育においても、アクティブラーニングの視点からの教育を取り入れ、従来の教員からの一方的な授業ではなく、学生が主体的に学び、自らの知識をもって

問題を発見・解決していくような講義を行うことが求められている。

一方、幼稚園、小学校、中学校の学習指導要領改訂の3つの基本的な考え方として、文部科学省は「教育基本法改正等で、明確になった、教育の理念を踏まえ、「生きる力」を育成」、「知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視、授業時数を増加」、「道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな体を育成」を挙げている。特に「主体的、対話的で深い学びの基礎を作る」というアクティブラーニングの視点に立った授業展開が求められるようになり、小学校体育においても、すべての内容の目的において、アクティブラーニングの視点を取り入れられるようになった。これらの能力については、教育者自身が、実際の教育現場で指導する際に身につけておくべき能力であるともいえる。

以上のことから、特に教員養成を行う大学での講義において、アクティブラーニングの視点に立ち、より活発で、学生が主体的、対話的に学ぶ意識を持った講義を展開していく必要がある。その方法の一つとして挙げられるのが、学生間相互評価活動である。

学生間による相互評価を講義で取り入れることは、学生の自発的なスキル向上を促すことが可能であり、自発的な意識改革を促す効果が十分にみられるとまとめている。(河野ら2014) (1)

また、レポート作成での相互評価ではあるが、学生間の相互評価を講義に取り入れることで、学んだ内容を使い、さまざまな問題に対して発想を広げていく効果もあり、特に大学での講義において利用していくことができると結論づけている。(石橋 2010) (2)これは、相互評価をとおして、学生一人一人が同じ学生の視線を意識しながら学習に取り組むことになり、自然と学びに変化が生まれてくるからであり、相互評価は学習に対する学生の動機づけにおいて

効果的であるといえる。この学びの姿勢の変化がアクティブラーニングでいうところの主体性につながり、学びの深化において効果的であると考えられる。

これら、実践報告や研究結果からも、学生間相互評価が及ぼす影響は大きいとともに、現在大学に求められているアクティブラーニングの視点を取り入れた講義を行うにあたり、有効な手段の一つである。

しかし学生間相互評価については、多くが教養科目等での実践(大倉ら2004)(3)(松本2000)(4)であり、各専門科目講義での実践報告は少ない。体育分野での実践報告も少なく、本学体育科目において実践し、その効果について検証を行うことで、体育科目分野での学生間相互評価の活用についてその有効性を検証する。

II 本学の状況

学生間相互評価の実践にあたり、本学と対象学生の特徴について説明する。

まず、本学の特徴としては、2年制の短期大学であり、保育者と教員養成を目指す子ども学科と、日本文学について学ぶ国文学科に分かれている。子ども学科では、保育士資格、幼稚園教諭二種免許状、小学校教諭二種免許状、学校図書館司書教諭資格の取得が2年間で可能である。また、国文学科では、司書資格の取得が可能である。

本実践報告の対象となるのは、子ども学科で開講されている体育科目である「体育Ⅱ」となる。

子ども学科の学生の特徴については次のとおりである。多くの学生が、入学当初から保育者、教育者になるという目的意識を持ち入学してくる。したがって、入学時にはすべての学生は、本学で取得可能な資格、免許の取得を目指している。体育Ⅱについては、資格に関わる選

択科目ということもあり、毎年多くの資格、免許取得希望者が受講している。しかしながら、本学は体育系学科ではないため、学生で運動系の部活動経験者は多くはなく、逆に特定の運動に苦手意識を持つものが多い。そのため、学生間で運動能力に差があり、講義に対するモチベーションについても、学生間で差があり、毎年学生の講義に対するモチベーションや学びに対する姿勢をどのように高めていくかが課題として挙げられている。

体育Ⅱの講義内容については、体育科の運動領域の中でもボール運動を中心とした内容を扱っている。特に学校教育の現場で広く行われている運動競技を扱っている。行う競技は、ゴール型競技のバスケットボール、ネット型競技のバレーボールとバドミントンの3種目を行う。理由としては、前述のとおり、運動経験や部活動経験を持つ学生が多くないことから、すべての学生が学校教育において経験している運動種目を行うことで、すこしでも苦手意識を持たず、運動に親しみ、講義にのぞめるのではないかと考えたからである。

本講義では、各種目の基本動作の習得を目指す一方、将来保育者、教育者に求められる指導方法の習得も考慮した内容を行うことをねらいとしている。

Ⅲ 方法

春学期に実施する体育Ⅱにおいて、学生間相互評価を活用した講義を実施する。対象となる学生は、本学子ども学科2年生で、保育士養成コースと小学校教諭養成コースに在籍する学生である。本講義の履修学生数は、全体で24名である。コースごとの人数は、保育士養成コースに在籍する学生が23人、小学校教諭養成コースに在籍する学生が1名である。すべての学生がそれぞれの進路に必要な資格、免許取得を目指している学生である。

実施方法については次の手順で行う。

学生間相互評価活動を実施する講義は、全15回の講義のうち、8コマ分において、講義の最初30分を利用し、学生がグループでウォーミングアップの指導を模擬授業形式で行う。

グループに分けについては、24名の受講生を均等に3人1グループで分ける。グループメンバーと発表順は公平に、くじ引きで決める。

模擬授業の方法については、講義開始のチャイムを合図に模擬授業を開始、先生役の学生が、生徒役の学生を集合させるところから始める。その後、グループの1名ずつが主担当の先生役となり、5分から8分でウォームアップやコーディネーショントレーニングの指導実践を行う。3人が指導を終えたところで、模擬授業を終了し、本来の計画されていた講義内容を行うという流れで行った。

模擬授業を行う学生は、写真1・2のレポート用紙の指導計画部分を記入し、その内容で模擬授業を行う。

写真1 レポート用紙【指導案等記入用紙表面】

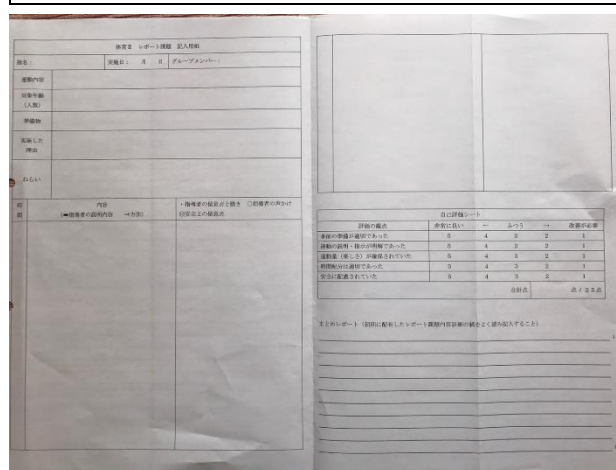
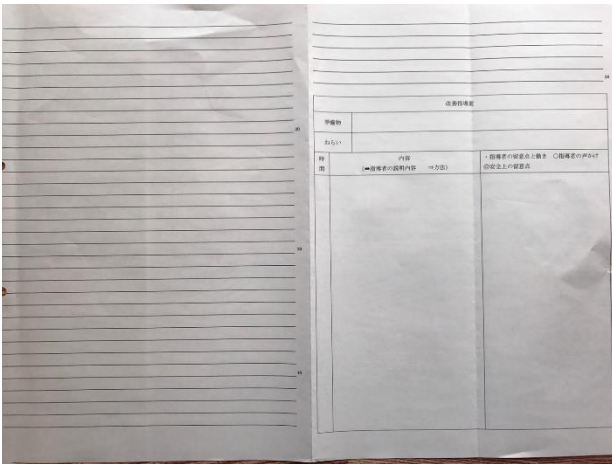


写真2 レポート用紙【指導案記入用紙裏面】



模擬授業実施後、講義外で自己評価と、レポート記述、改善した指導案を記入し、模擬授業を実施した次回の講義内で提出するようにした。これは、PDCAサイクルを意識した、授業改善につなげるために行った。Pについては、事前の指導計画が当てはまる。Dは、模擬授業。Cは自己評価。Aは反省のレポート。そしてAからPに繋げるため、改善した指導案の立案までを行った。

学生間相互評価については、生徒役の生徒は写真3の評価シートを基に評価を行い、コメントを講義後記入し、次回の講義で評価シートを提出する。評価シートについては、先生役の生徒にフィードバックする。コメントについては、できる限り具体的な記述を促した。その理由として、授業時数の関係で、2回目の模擬授業実施は実施できないことから、コメント記入をとおして、自身が模擬授業を行ってなくても、自分だったらどのように改善していくのかをPDCAサイクルの視点から、常に考え、生徒役であっても主体的に授業に取り組む態度や姿勢を高める意図からである。

写真3 評価シート

体育II評価シート

3人目 氏名: _____

評価の観点	非常に良い	←	ふつう	→	改善が必要
事前の準備が適切であった	5	4	3	2	1
運動の説明・指示が明解であった	5	4	3	2	1
運動量（楽しさ）が確保されていた	5	4	3	2	1
時間配分が適切であった	5	4	3	2	1
安全に配慮されていた	5	4	3	2	1
合計点				点 / 25点	

～総評～（あなたの考える良かった点、改善点を必ず記入してください）

良かった点:

改善点:

※評価は、「ふつう」を標準とし、特に優れている部分があるものについて加点すること。
※改善点などを書く際には、必ずどのように改善すればいいの具体的な記入すること。

評価項目については5項目設定した。項目は表1のとおりである。

表1 評価シート項目

1	事前の準備が適切であった
2	運動の説明・指示が適切であった
3	運動量（楽しさ）が確保されていた
4	時間配分は適切であった
5	安全に配慮されていた

その他、コメント欄として、「良かった点」「改善点」をそれぞれ記入する欄を設けた。

結果の検討方法については、学生の自己評価と生徒役の学生からの評価を得点化し、その内容を精査することで、講義回数や模擬授業の回数を追うごとに、学生の評価活動にどのような変化が生まれていくのかを検証する。

また、評価方法として授業アンケートも活用する。表2はアンケート項目である。

表2 アンケート項目

(1) 授業内容は興味・関心が持てましたか。
(2) 授業内容をよく理解できましたか。
(3) この授業はシラバスに沿った内容でしたか。
(4) 学生の理解を促す工夫がされていたか。
【言葉による説明だけでなく、適切な資料、板書等の活用】
(5) 工夫してほしいと感じたことを選んでください。
【5=私語への対応、4=聞き取りやすい話し方、3=教科書・配布資料の活用、2=分かりやすいパワーポイントや板書、1=特になし】
(6) 教員は学生の理解や反応を見ながら授業を進めていましたか。
(7) 教員からの一方的な授業ではなく、発表・話し合い等の工夫がありましたか。
(8) あなたは、この授業に関して積極的に意見を述べたり、質問したりしましたか。
(9) あなたは、この授業を継続して学びたいですか。
(10) あなたは、この授業の予習・復習など自主学習を、1週間あたりどのくらい時間をかけましたか。
【5=週3時間以上、4=週2～3時間、3=週1～2時間、2=週30分以上1時間未満、
5=「非常にそう思う」4=「そう思う」
3=「どちらでもない」2=「そう思わない」1=「全くそう思わない」

その他、「【授業アンケート】(記述式)」に基づき、学生の授業の感想も検討する。

以上、模擬授業をととした学生間相互評価活動と授業アンケートを用いて、体育分野における講義においても、学生間相互評価活動が学生の講義に対する学びの姿勢に好影響を及ぼし、学生の自発的な意識改革やアクティブラーニングに謳われる、主体的・対話的で深い学びを生んでいくことに効果があることを検証する。

IV 結果

受講生 24 名中、1 名が途中で履修を放棄したため、模擬授業と相互評価活動については、23 名が行った。表 3 は各学生の指導実践の学生間相互評価を得点化し、平均値をまとめたものである。

表 3 学生間相互評価結果平均値表

順番	人数	氏名	1	2	3	4	5	合計	平均値
1組目	1	E.T	4.40	4.35	4.40	4.55	4.40	22.47	21.81
	2	S.N	4.58	4.68	4.53	4.63	4.58	23.00	
	3	S.M	4.58	4.00	4.42	3.68	3.89	20.58	
2組目	4	A.S	2.89	2.56	3.44	3.17	3.78	15.83	20.49
	5	M.A	4.00	3.78	4.28	4.22	3.89	20.17	
	6	A.A	4.33	4.17	4.00	4.22	4.33	21.06	
3組目	7	M.A	4.06	3.94	3.94	4.22	4.33	20.50	21.18
	8	Y.K	4.33	4.39	4.50	4.39	4.33	21.94	
	9	K.M	4.11	3.78	4.39	4.17	4.00	20.44	
4組目	10	Y.N	4.05	3.95	4.45	4.15	3.90	20.50	19.67
	11	M.T	4.11	3.63	4.11	3.95	3.84	19.63	
	12	M.O	4.35	4.18	4.24	4.12	4.12	21.00	
5組目	13	N.H	4.18	4.24	3.94	3.94	4.24	20.53	19.88
	14	K.F	4.06	3.88	4.18	3.24	3.82	19.18	
	15	N.K	4.31	4.50	4.25	4.19	4.31	21.56	
6組目	16	M.H	4.44	4.44	4.38	4.44	4.00	21.69	21.35
	17	Y.F	4.31	4.38	3.94	4.13	4.25	21.00	
	18	S.Y	4.06	3.88	3.71	3.82	3.88	19.35	
7組目	19	N.N	4.00	3.82	3.94	3.94	3.82	19.53	20.18
	20	M.H	4.12	4.12	4.29	4.29	4.06	20.89	
	21	M.Y	3.11	2.93	2.94	3.11	3.72	15.72	
8組目	22	T.H	4.00	3.78	4.06	3.89	4.00	19.72	20.00
	23	T.S	4.00	4.28	4.11	4.22	3.89	20.50	

得点としては、1 回目から 8 回目まで大きな変動は見られなかった。4 組目以降、総得点が若干低くなった。6 組目以降では、総得点がまた 20 点を超える結果となった。各項目についての得点については、説明方法を評価する項目 2 において、一番低い得点を示した。それぞれの学生間で得点の差がみられ、学生個人の実践力が得点に大きく影響しているといえる。

表 4 は、自己評価の得点をまとめたものである。

表 4 自己評価得点表

順番	人数	氏名	1	2	3	4	5	合計
1組目	1	E.T	4	3	3	2	4	16
	2	S.N	4	4	4	4	4	20
	3	S.M	4	3	4	3	4	18
2組目	4	A.S	1	1	2	3	3	10
	5	M.A	3	2	2	2	2	11
	6	A.A	4	2	3	4	4	17
3組目	7	M.A	4	2	3	4	4	17
	8	Y.K	5	3	4	4	3	19
	9	K.M	4	3	3	5	5	20
4組目	10	Y.N	3	2	3	1	3	12
	11	M.T	3	3	3	2	3	14
	12	M.O	1	1	2	4	4	12
5組目	13	N.H	4	4	3	3	4	18
	14	K.F	3	2	3	3	4	15
	15	N.K	4	3	3	4	4	18
6組目	16	M.H	2	4	3	4	2	15
	17	Y.F	4	4	3	5	4	20
	18	S.Y	4	4	4	4	4	20
7組目	19	N.N	2	2	2	2	2	10
	20	M.H	4	4	4	5	3	20
	21	M.Y	2	2	2	2	2	10
8組目	22	T.H	5	3	4	4	5	21
	23	T.S	4	4	4	4	4	20

表 3 の学生からの評価と比べ、自己評価では低い得点になった。学生間相互評価の低い学生については、自己評価も特に低い数値を示した。また、比較的早い時期に実施したグループの自己評価と学生間相互評価の得点では、大きな差があった。特に、4 番、5 番では、自己評価の得点が 10 点、11 点となったのに比べ、他学生からの評価では、20 点近い数値を示しており、自己評価と学生評価間に大きな差が見られた。しかし、21 番の自己評価 10 点に対し、学生からの評価が 15 点と、両者の差が少なくなっており、回数を追うごとに、学生たちの評価に対する姿勢の変化し、よりしっかりとした評価活動が行えるようになったと考えられる。

特に、項目 2 「運動の説明・指示が適切であった」と、項目 3 「運動量(たのしさ)が確保されていた」という部分については、他の評価と比べ、自身に 5 をつけた学生がいなかった。

表 4 から表 1 1 は各グループに対する、評価シートのコメントを抜粋したものである。

表 4 1 組目コメント

良かった点	
1組目	リレーの形式でウォームアップすることで、仲間と協力して楽しくすることができた。 説明も、生徒を休ませている間にしていたので良かったと思った。 説明がわかりやすかった。
	徐々にキャッチボールが難しくなっていくのはとてもよかった。 次のバレーにすんなり行けた
	順次難易度を上げていき、できたときの喜びが味わえることが楽しかったです。
	改善点
	できなかった時に最後までこのっているのが恥ずかしかったので、あまりそういうのがないとうれしいです 負け続きのグループへの声掛けや工夫ができるとよかったです。 声が小さい

表5 2組目コメント

2 組 目	良かった点
	背中に挟んでボールを運ぶのはとても難しかったけど、2人ペアの中が深まったりので良かった
	ボールを使ってパスをする時に名前を呼んでっしていたので、コミュニケーションをとる良いきっかけになると思いました。
	バレーボールの導入として取り入れたのは良かった
	改善点
	伸長差があるところもあり、やりにくそうだった。ペアの伸長をそろえては。ボールの持ち方をきちんと説明したほうが良かった。掌でボールを挟んでいる人がいた指導するうえで必要なのはしっかりと覚えておく必要があると感じた。

表6 3組目コメント

3 組 目	良かった点
	みんなで楽しくできた
	コーンが置かれていて、運動する範囲がわかりやすかった
	説明がわかりやすかった
	改善点
	1回だけの実施だったので、もっとしたいという声もあり、時間を考えて2回してもよいもっと大きな声で説明したほうがよかった 二人で走る時、円が結構大きくて走るところが狭いので、こけそうで怖かった

表7 4組目コメント

4 組 目	良かった点
	事前にみんなの分のしっぽにする布を作っていてよと思った。色分けしてあって、チーム戦でやるのも面白かった。
	見本も見せていてわかりやすかった。
	どこにパスを出したらいいか考える力がついて良いと思った。
	改善点
	始める時間がわからなかった。遊びでやっている子を見て、勘違いしている子もいたので、スタートと伝えるまではボールを投げないっていっておけば、もっと初めと終わりがわかりやすくなると思う。 最後時間をたすためにもう一度やったのは良かったけれど、説明が不十分でわかりづらく、急で子どもたちなら困惑してしまうと思う。 しっぽを2本とかにしたら、もっと楽しくできるのではと思った。

表8 5組目コメント

5 組 目	良かった点
	バスケットとからめた鬼ごっこで楽しかった。
	一人ずつに「上手だね」などの言葉かけをしていたことがとてもよかった
	内容がとてもシンプルで簡単だった。ボールになれた子どもたちにとっては良いと思う。
	改善点
	ゼッケンを着たほうが、よりわかりやすかったと思う。 進むスピードが速かった。 時間配分が気になった。時計を見ながら減らすところは減らすとかの対応も必要だと思う。

表9 6組目コメント

6 組 目	良かった点
	先生としての言葉づかいや笑顔で指導ができてよかった。
	バスケットボールをする事前の導入として取り入れたのは良かった。声掛けの際の「できそうですか」と聞いかけするのはとてもよかった。
	運動量もバスケットにあっていたよかった。
	改善点
	自由に広がる時、友達とボールがあたって危ない。 もう少し楽しくなるような工夫をしないと、ダラダラしないんじゃないかと思う。 壁をタッチするのではなく、コーンを回るなどに改善したら安全かなと思いました。

表10 7組目コメント

7 組 目	良かった点
	一人一人の顔を見て進められていた。
	仲間意識が高められるのでいいと思う。
	普段する内容のリレーとは違い楽しかった。
	改善点
	なかなか終わらない時の対処法を考えておいたほうがいいなと思った。 ヒョウタン鬼のように、線の中にいる人を線の外にいる人がボールを投げてあてるゲームでも楽しいなと思った。 子どもがしたときに、押してしまう可能性があるかなと思う。

表11 8組目コメント

8 組 目	良かった点
	徐々に回数を増やしていったのが良かった。
	競うことで意欲が持てるからいいと思う。
	グループでシュートする数を数えることでチームワークを高めることができた。
	改善点
	あと何回やるのかわかるように説明してほしい。 シュートが入らないのが周りにわかり、責任があるのが嫌だった。 パスをバウンドさせるなど、変化を入れる工夫をしたほうが良いと思った。

コメントについては、初回のコメントは具体的で内容的にも非常に良い内容であった。これは、初めてのコメント記入ということもあり、学生全員が緊張感をもって模擬授業を受けており、他の回以上にしっかりと記入をした結果だと考える。

良かった点についてのコメントでは、回を追うごとに、コメント内容の変化が見られた。当初は、「楽しかった」「面白かった」などのコメントが多く見られたが、4組目では、事前準備に言及したコメントや、5回目以降では、教員としてどのように子どもたちの前で指導をするのか、についてのコメントがあり、「先生としての言葉づかい」などの良かった点について回答しているものが多くみられるようになった。7組目へのコメントでは、「生徒一人一人の顔を見ていた」など、教師の視線についての意見もあり、学生の中で、教師がどのような行動や生徒に対する見守り方がよいのかについて検討できるようになった。

改善点コメントについては、当初は、運動内容について、生徒目線でのコメントが多く見られた。しかし、改善点のコメントでも、回を追うごとにコメント内容に変化が見られるようになり、教師としての具体的な指示の出し方や、

内容をどのように変更することで、より楽しく、安全に行えるのかなどの、教師目線でのコメントが多く見られるようになった。とくに、5組目へのコメントから、「ゼッケンを着たほうがわかりやすかった」や、7組目の「子供がしたときに、押しってしまう可能性がある」など、いかに子どもたちが安全に運動を行うことができるかについてのコメントが見られ、回数を重ね、学生の中に教師目線で授業を検討していく意識や、授業運営の部分について検討し、授業改善につなげていく意識が生まれてきたいと考えられる。

最後に、授業アンケートについて結果を記述する。以下表12、表13、表14、表15は大学全体、子ども学科全体、子ども学科2年生、体育Ⅱにおけるアンケート結果を集計した表である。

表12 授業アンケート体育Ⅱ結果

	5	4	3	2	1
(1)	52.2	30.4	13	4.3	0
(2)	56.5	34.8	8.7	0	0
(3)	52.2	39.1	8.7	0	0
(4)	39.1	52.2	4.3	0	0
(5)	8.7	26.1	4.3	0	60.9
(6)	47.8	47.8	4.3	0	0
(7)	47.8	43.5	4.3	4.3	0
(8)	47.8	39.1	8.7	0	4.3
(9)	52.2	30.4	8.7	0	8.7
(10)	13	0	13	17.4	56.5

表13 授業アンケート大学全体結果

	5	4	3	2	1
(1)	34.5	44.8	16.6	3	1.1
(2)	28.5	46.5	20.5	3.3	1.3
(3)	36.9	42.9	18.4	1	0.7
(4)	30.9	43.6	19.7	3	2
(5)	9.2	11	8.1	10.2	61.5
(6)	30.3	43	21.1	3.8	1.8
(7)	31.8	36.5	23.5	5.4	2.8
(8)	20.7	28.8	29.3	11.8	9.2
(9)	28.3	34.1	26	5.9	5.4
(10)	6	5.6	15.2	23.1	49.1

表14 授業アンケート子ども学科全体結果

	5	4	3	2	1
(1)	33.1	46.1	17.1	2.8	0.8
(2)	28.6	47	20.9	2.3	1.1
(3)	35.5	44.9	17.8	0.8	0.9
(4)	30.6	44.1	20.1	2.2	1.9
(5)	8.9	10.4	8.3	9.2	64.1
(6)	30.4	44.5	20.4	3.1	1.6
(7)	33.1	40.1	21.1	4.1	1.7
(8)	22.3	31.7	29.5	10.1	6.2
(9)	27.7	35.7	26.1	5.9	4.5
(10)	6.1	6	14.6	21.7	50.5

表15 授業アンケート子ども学科2年生結果

	5	4	3	2	1
(1)	29.7	51	16.1	3	0
(2)	25.6	52.1	19.3	2.6	0.2
(3)	29.9	50.3	17.3	1.5	0.9
(4)	27.3	48.6	20.2	0	1.1
(5)	11.5	12.7	12.5	10.4	52.9
(6)	27.6	49.7	19.7	2	0.9
(7)	29.9	46.8	18.7	3.3	1.3
(8)	20.4	40.6	27.6	5.4	5.2
(9)	21.2	45.3	24.1	4.8	4.5
(10)	5.6	5.9	14.1	24.1	48.6

本講義では、多くの項目において、「非常にそう思う」「そう思う」など、高評価を得た。以上のアンケート結果の中で、本研究の目的である、学生の興味・関心や学びに対する姿勢について比較する。

比較する項目については、興味・関心について項目(1)(9)、主体的な学びの姿勢については項目(7)(8)(10)を比較する。

まず興味・関心を表す項目(1)(9)について結果の比較を行う。

項目(1)では、体育Ⅱ受講生の中で「非常にそう思う」と答えた学生が52.2%であった。半数以上の学生が講義内容に非常に強い興味・関心を持つ結果となった。同じ項目で、大学全体の34.5%、子ども学科全体の33.1%、子ども学科2年生全体の29.7%と比べ、体育Ⅱでの数値が高くなった。

本講義を継続して学びたいか、という項目(9)では、体育Ⅱ受講生の中「非常にそう思う」と答えた学生が 52.2%であった。半数以上の学生が、本講義を継続して学んでいきたいと答え、本講義が学生にとって有益な講義であったと言える。また、同じ項目で他の結果と比較しても、大学全体の 20.7%、子ども学科全体の 33.1%、子ども学科 2 年生全体の 20.4%となり、項目(9)においても体育Ⅱが高い数値を示した。

次に、学生の主体的な学びや、学びに対する姿勢について、項目(7)(8)(10)の結果を比較する。

項目(7)では、体育Ⅱ受講生の中で「非常にそう思う」と答えた学生が 47.8%であり、約半数の学生が講義内容について、一方的な講義ではなく、学生間での学び合いや発表機会があったと感じている。この結果から、学生自身が、講義内において話し合いが多くできたと実感しているということが言える。同じ項目比較すると、大学全体で 31.8%、子ども学科全体で 33.1%、子ども学科 2 年生全体で 29.9%であり、体育Ⅱにおいて、高い数値を示した。

項目(8)では、体育Ⅱ受講生の中「非常にそう思う」と答えた学生が 47.8%であり、約半数の学生が、講義中に積極性があったと感じている結果となった。同じ項目で、大学全体の 20.7%、子ども学科全体の 33.1%、子ども学科 2 年生全体の 20.4%と比べ、項目(8)においても体育Ⅱで高い数値となった。

項目(10)の自主学習時間については、体育Ⅱでは、「週 3 時間以上」と答えた学生が、13%、「週 1~2 時間」と答えた学生が 13%、「週 30 分以上 1 時間未満」と答えた学生が 17.4%、「30 分未満」と答えた学生が 56.5%と、自主学習時間が少ない結果となった。大学全体、子ども学科全体、子ども学科 2 年生の結果を見ても、大きな差がない結果となり、週 30 分未満の自主学習であった学生がいずれの結果においても約半数であった。

最後に授業アンケート【記述式】の結果について記述する。下表は授業アンケートの結果において、講義に対する興味・関心と、学びの姿勢に関する記載を抜粋してまとめたものである。

表 1 6 授業アンケート【記述式】コメント抜粋

学びに対する姿勢の回答	
①	模擬授業や各種目のテストがあったためそれに向かって自主的に練習したりすることができました。
②	指導するにあたって、計画性があり、指導案を立てる重要性を実感することができました。
③	課題があることで一生懸命頑張ろうと思えました。
④	先生になって、みんなを指導することの体験ができてよかったです。
マイナス意見	
①	レポートと発表が嫌だった。
講義への興味・関心	
①	スポーツを楽しむことができました。※同様の回答が他11件
②	前より運動が楽しくなりました。
③	種目を増やしてもよいのではないかと思います。

学びに対する姿勢については、「自主的」や「計画性があり、指導案を立てる重要性」「課題があることで一生懸命頑張ることができた」「体験ができてよかった」など多くのポジティブな意見が見られた。しかし、1 件「レポートと発表が嫌だった」という意見もあった。講義への興味・関心については、「楽しかった」が本も多く、本講義を好意的に受講したことをあらわす結果となった。また、講義をとおして「前より運動が楽しくなりました」という意見もあった。

「種目を増やしてもよいのではないかと思います」では、学生がみずから本講義内容について意見を出し、講義に対する興味・関心が大きくなっただけではなく、どのような改善をすることで講義内容が改善され、自身の学びをより良くしていけるのか、自身の学びがより深くなるのかについて、学生自ら主体的に考えるようになった。

V 考察

以上の結果から、本研究の目的である、体育

科目分野における講義においても、学生間相互評価活動を講義に導入することで、学生の学びの姿勢に好影響を及ぼし、学生の自発的な意識改革やアクティブラーニングに謳われる、主体的・対話的で深い学びを生んでいくことに効果があることを検証する。

学生からの評価結果と自己評価を比較した結果、初期の両者の評価結果に差異が出ていたことと、8回目の評価の比較では、両者の評価に一定の共通点が見られたことから、回を重ねることで、学生の評価がよりシビアな評価に変化したことが考察される。これは、評価を重ねることで、前回までの内容との比較や、客観的に模擬授業内容を評価する力が身についたからであると考えられる。また、学生の取り組み姿勢にも一定の変化が生まれ、初期の段階では、学生間のつながりや友人等への遠慮から得点を高く配点していたものが、評価活動の回数を重ねることで、自ら考え、自身の考えに基づく適切な評価を記入することができるようになったと考えられる。

その他、学生の学びに対する姿勢の変化については、評価コメントの内容からも明らかにできる。初期段階では、コメント内容からも、「楽しかった」など単純なコメントが多く見られたが、回数を重ねるごとに、コメント内容もより具体的になった。また、対象学生の多くが教育者を目指しているということもあり、コメントにおいて、教師目線での具体的なアドバイスが増える結果となった。学生たちが、自らの学びについて、将来の目標意識を持ち、評価活動をとおして、お互いに学び合い、よりよい授業づくりをしていく意識が生まれたからではないだろうか。これらのことから、学生間相互評価をとおして、学生たちの学びに対する姿勢が変化し、好影響を及ぼしたことが言える。また、評価活動をとおして、自ら考え、その考えに基づいた適切な行動、今回で言えば、適切な評価を下す力が身についたと言える。

次にアンケート結果について考察する。興味・関心について項目(1)(9)において、本講義の結果が高い数値を示したことは、学生間相互評価を行うことが、本講義に対し、学びへの興味・関心を引き出すということに、効果的であったと考える。また、記述式アンケートにおいても、模擬授業・相互評価活動の一連の流れが自身の学びに役に立ったと回答しており、講義自体への興味・関心を高め、自身の学びを深めることに成功したと考えられる。しかし、「楽しかった」という回答については、講義が充実した内容であったという見方もできるが、運動自体が楽しかったという捉え方もできることから、授業の楽しさと学びの深化については、更なる検証のため、講義の何が楽しかったのかについて明らかにしていく必要であると考えられる。

主体的な学びの姿勢については項目(7)(8)(10)を比較する。いずれの項目においても高い数値を示したほか、記述式解答においても、模擬授業や課題について、学生の自発性や、取り組み姿勢、将来に役立つなどの回答を得ることができた。これは、模擬授業のみを行うのではなく、相互評価活動を取り入れたことで、学生の取り組み姿勢に変化が起こり、その結果模擬授業や講義内容に、より前向きな態度で取り組むことができた結果であると考えられる。

VI まとめ

今回の実践をとおして、体育講義においても、学生間相互評価活動が、学生の学びに対する姿勢を変化させ、自発的な意識改革やアクティブラーニングに謳われる、主体的・対話的で深い学びにつながることに、一定の効果があることが示唆された。特に、学びに対する姿勢や自身の考えを持つ、という部分においては非常に有効な手段であったと言える。また、本学のような教員養成校においては、相互評価活動

を行うことで、生徒目線での考え方から教師目線での考え方への変化を促すことができた。教員を目指す学生にとって、評価活動は将来の仕事において常に向き合っていかなければならない内容である。人物に左右されず、常に客観的な視点から評価をしていく必要があり、学生間相互評価活動を行うことで、教師として求められる評価視点の育成につながることも明らかになった。

一方、学生の授業理解や、今回の実践で言えば、模擬授業の改善についてはその効果を確かめることはできなかった。その要因として挙げられるのは、模擬授業の実践が時間的な制約もあり、一人1回にとどまったことがあげられる。そのため、PDCAサイクルでいう、Aのアクションに当てはまる、改善の検討と、2週目のPである、改善した指導計画の立案で終わってしまったことが、要因として挙げられる。今後、模擬授業を複数回行い、相互評価活動をさらに行うことで、自身の模擬授業がどのように改善され、また授業の実践力がどのように変化したかを学生が実感し比較できる講義内容にしていく必要があると考える。そして、そのことが体育講義における学びの理解度を高め、学びの深化において、どれほどの効果があるのかについて、明らかにしていくことで、次代に求められる大学での体育講義の在り方や、教育法の検討において必要なことであると考えている。

子ども学科・教授

-
- (1) 河野昭彦、斎藤博嗣、佐々木大輔、平澤一樹、須田達、鶴谷奈津子(2014), 学生の相互評価によるアクティブラーニング型授業
 - (2) 石橋潔(2010), レポート相互評価法—大学における授業実践の試み
 - (3) 大倉孝昭、高村博正、奥田アレックス・H(2004), 英語による効果的なプレゼンテ

ーションと相互評価—連続性・発展性の視点から

- (4) 松本重男(2000), チームでプロジェクト活動を行う科目での教育評価：学生の相互評価と教員の評価観点